

資源管理型漁業推進総合対策事業

(沿岸特定資源調査)

高山 治・平野 忠¹⁾・伊藤 秀明・高林 信雄²⁾

(目 的)

対象地区における磯根資源のうち、最も重要な魚種であるアワビが近年急激に減少している。枯渇するアワビ資源の保護を含め資源増大を目指し、漁業者が策定する資源管理計画に必要な諸調査を行った。

1. 漁獲統計調査

過去における、岩崎村大間越地区の漁獲量について調査を行い、漁獲実態及び年次別漁獲動向を把握する。

2. 標本船調査

主に磯根漁業に従事する漁業者（12名）に対し、操業日誌（別添様式）に操業状況の記録方を依頼し、取り纏めを行い漁獲場所、漁獲水深及び漁獲量実態を把握する。

3. 市場調査

漁獲したアワビについて、諸測定（殻長、湿重量、放流時殻長）を行い、漁獲サイズ、漁獲量、放流貝混獲状況を把握する。

4. 資源調査

大間越地先に4ラインの調査線を設定し、各々の調査線において水深2.5m、5m、10mの3地点について、10m（30㎡）のベルトラインにより底生生物の採取を行い、地先を構成する生物環境について把握する。

1) 現大畑地方水産業改良普及所 2) 現むつ地方水産業改良普及所

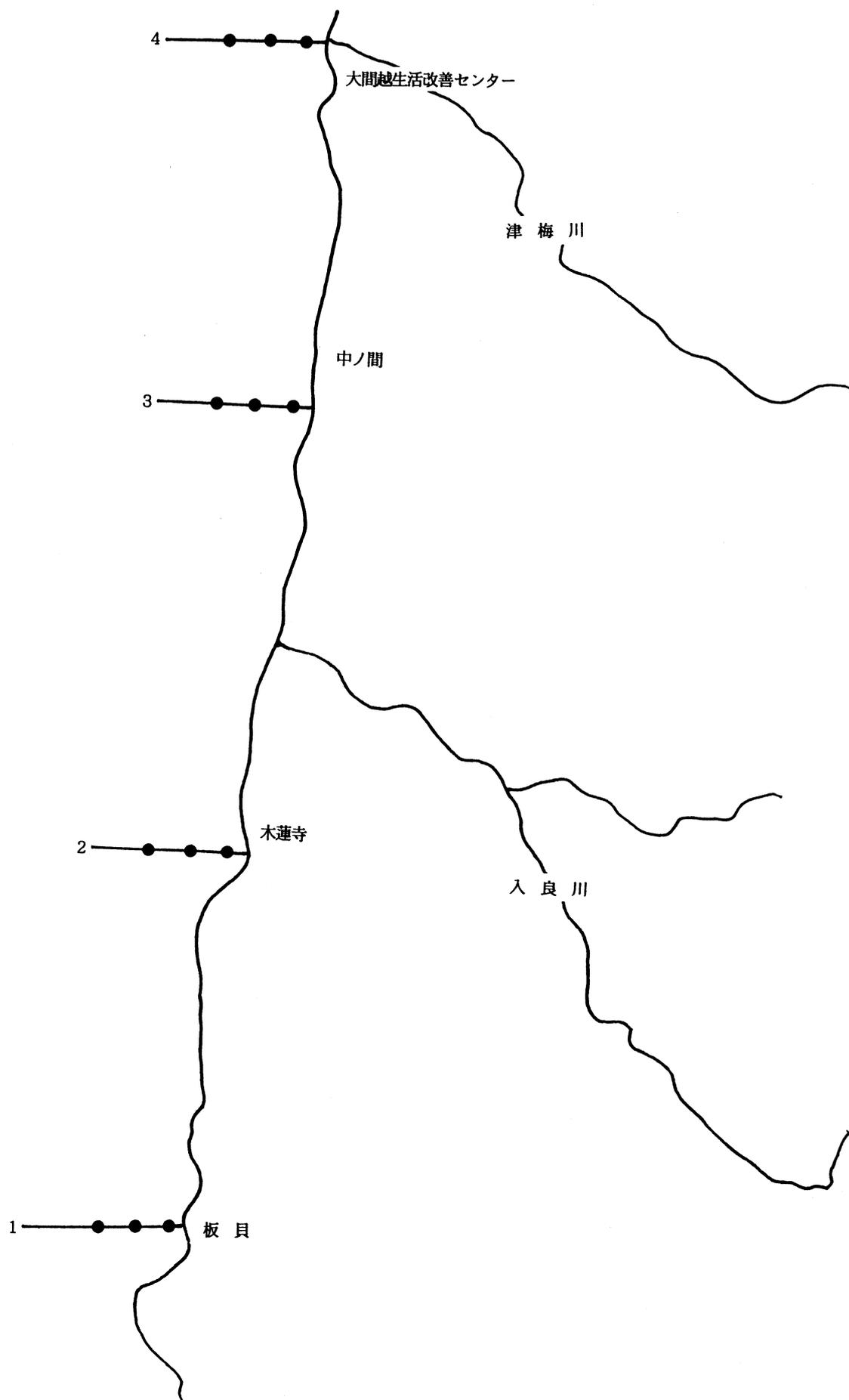


図1 調査地点図

1. 漁獲統計調査

(方 法)

対象地区における流通経路は秋田県側（秋田県北部漁業協同組合等）にある。そのため、漁獲量の把握のため、秋田県北部漁協の伝票から、アワビ数量及び金額の取り纏めを行った。なお、流通経路は漁協のみでないことから、以下に示す結果は最低値であり実際はこの数量より多いものと考えられた。

(結 果)

図2に年次別漁獲量及び漁獲金額を示した。平成5年度において漁獲量が増加しているが、この数値は禁漁区の水揚げ分が加わったものである。漁獲量は低水準を推移している。平均単価は9,000円/kg前後である。なお、平成5年度青森県全体の漁獲量は23,523kg（金額211,955千円）であり岩崎村分は927kg（金額8,698千円）である。大間越地区の漁獲量は県全体の0.89%である。

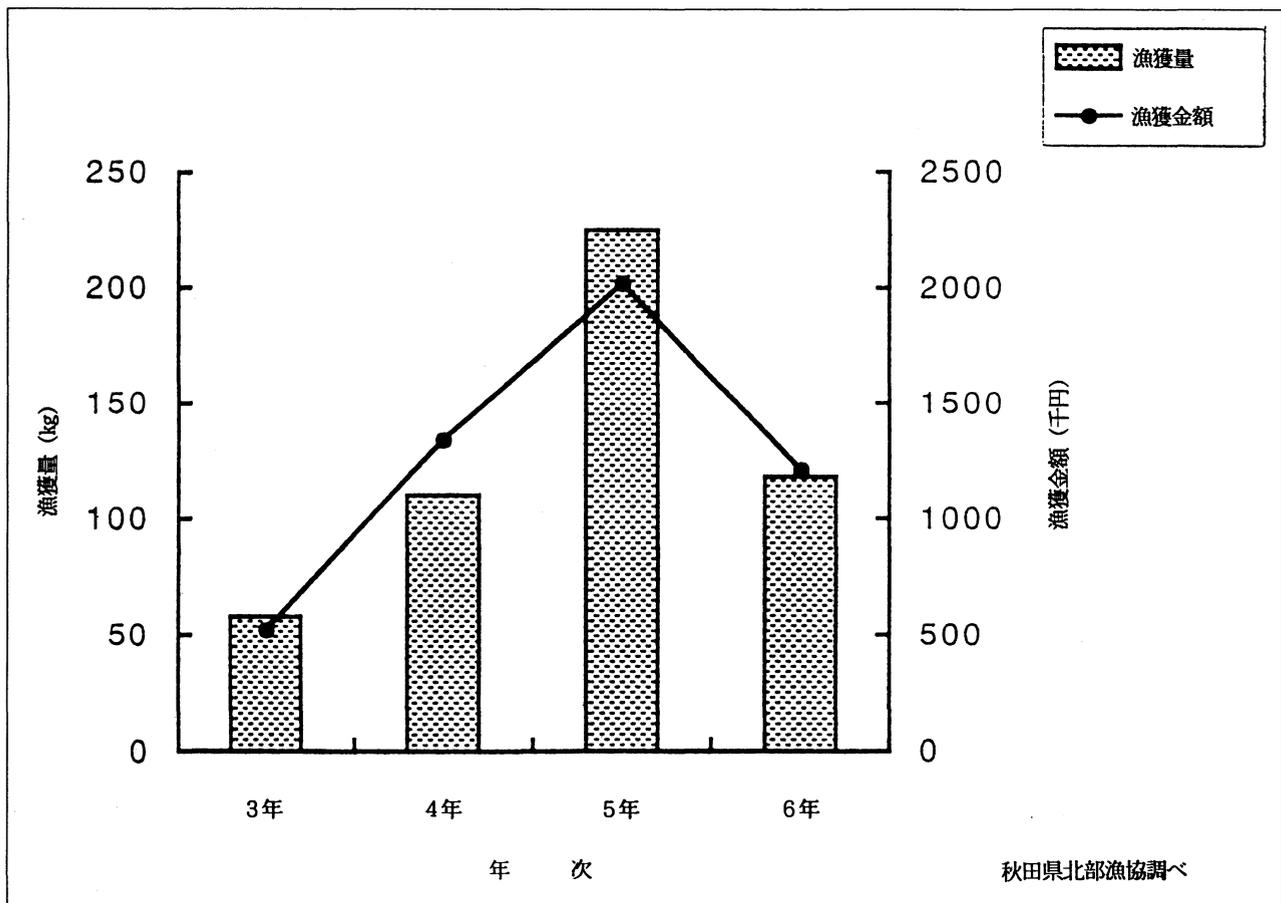


図2 岩崎村大間越における年次別漁獲量及び漁獲金額

2. 標本船調査

(方 法)

平成6年12月から平成7年3月までの間、主に磯根漁業に従事する漁業者（12名）に対し、操業日誌に漁獲量、漁獲場所、漁獲水深及び販売価格の記入方を依頼した。

(結 果)

表1に漁獲状況を示した。1回操業当たりの平均漁獲量は2.55kgであり、その平均単価は10,680円であった。また、操業は水深1～5mで行われている。

表1 標本船における漁獲状況

操業年月日	漁獲量(kg)	漁獲金額(円/kg)	漁獲水深(m)
6年12月24日	4	-	-
7年1月21日	3	-	-
7年1月22日	5	-	-
7年1月23日	1.5	9,500	2
7年1月23日	1.2	9,000	1~4
7年1月23日	2	13,200	1~4

操業年月日	漁獲量(kg)	漁獲金額(円/kg)	漁獲水深(m)
7年1月26日	3.1	11,000	-
7年1月27日	0.8	10,000	1.5
7年2月16日	4	12,400	1~4
7年2月16日	1.5	9,660	1~4
7年2月17日	2	-	-

3. 市場調査

(方 法)

平成6年12月及び平成7年6月に禁漁区より漁獲したものについて、諸測定(殻長、湿重量、放流時殻長)を行った。

(結 果)

図3に平成6年12月に漁獲したアワビの殻長組成及び放流貝混入割合を示した。共同採捕ということから漁獲サイズが90mm以上と守られている。モードも100mmと比較的大型個体である。また、ここで重要なことは、放流貝の占める割合が80%と漁獲アワビの殆どが放流貝であった。

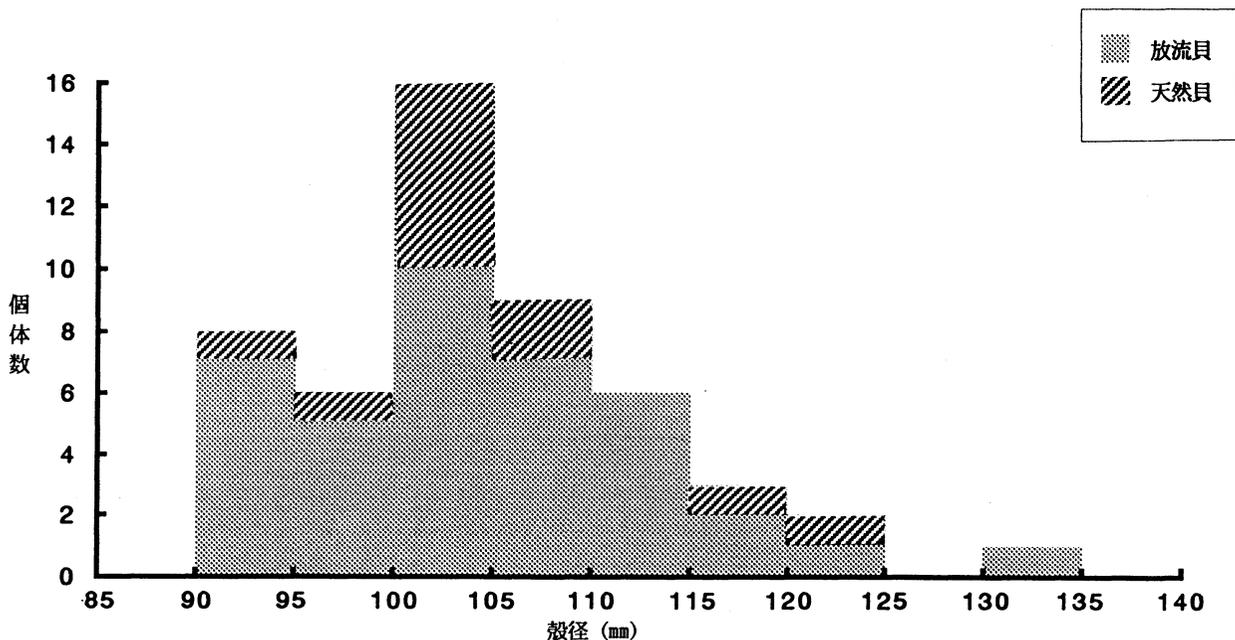


図3 禁漁区殻長組成

4. 資源調査

(方法)

平成6年10月19日及び同年11月24日に対象地区において、粹取り採取（動物1m×1m 2枠、植物0.5m×0.5m 1枠）を行った。しかし、底生生物が極めて少なく粹取りによる生物環境の把握が困難と判断し、併せて目視による生物組成の観察を行った。

(結果)

当該地先においてアワビの棲息密度が少ない。アワビが採取された調査線はライン1及びライン3（禁漁区）のみであった。

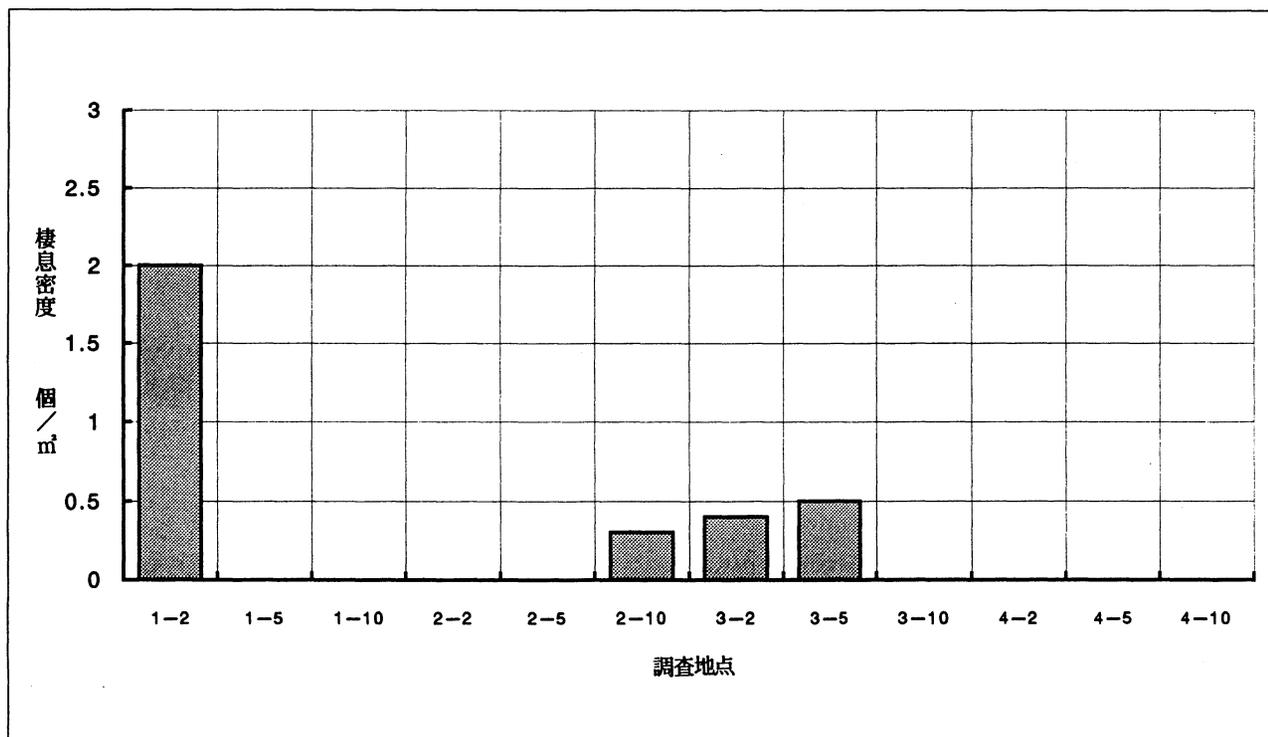
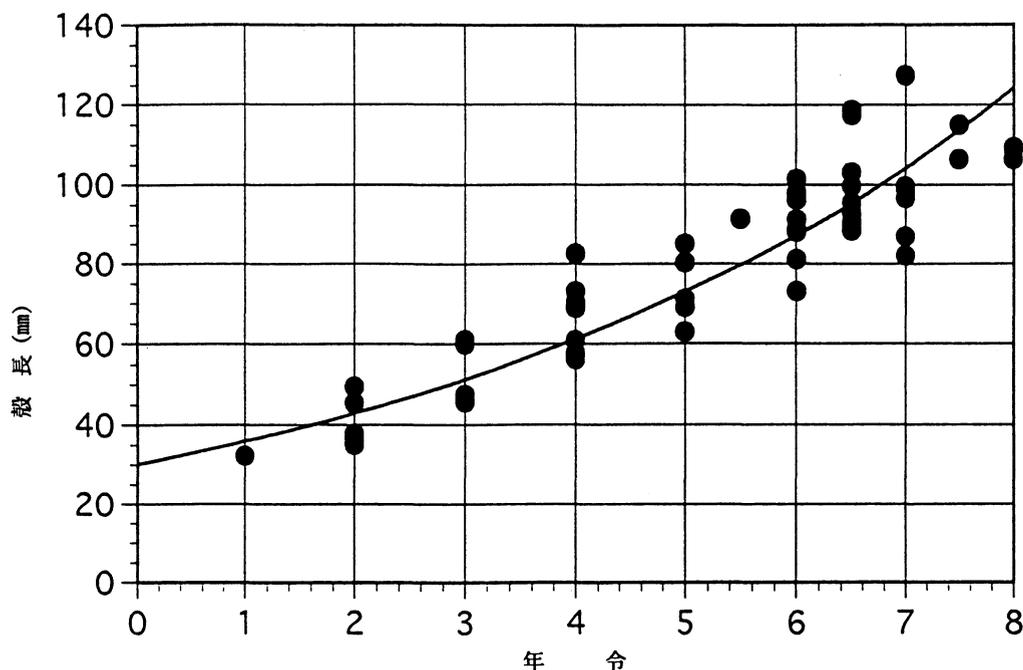


図4 目視によるアワビ棲息密度

5. アワビの年令査定

アワビ年令査定を行った結果を図5に示した。漁獲サイズの90mmに達するには6～7年が必要である。



$$Y = 30.08e^{0.177X}$$

(Y: 殻長、X: 年令)

相関係数 $R = 0.934$

図5 大間越地区における年令別殻長

6. 調査結果からの漁場評価

大間越地区において、アワビを始め磯根資源の棲息密度が極めて低い中、管理されている場では明らかに高い棲息密度が観察されている。即ち、禁漁区及び組合長自宅前で成員の棲息及び稚貝の発生が認められている。

漁獲実態として、禁漁区において、底生生物は全面漁獲禁止であり、漁獲は共同採捕により行われているが、禁漁区以外では周年サザエ漁が行われており、禁漁期でもアワビが採捕されている情報も聞かれる。今後、アワビ資源増大を目指すには、漁業者自身が県漁業調整規則に定める禁漁期及びサイズを厳守することは無論のこと、本調査結果から、資源保護と漁獲量増大のためには、今後新たな禁漁区を設け、現在の禁漁区とで輪採制を導入し管理していくことが必要と考える。なお、現地協議会の中で、新たな禁漁区を設けるのに際し、アワビ以外の魚種（サザエ等）も採れなくなるのは不服との意見もあり、全面禁漁が望ましいものの、サザエのみについては共同採取を行うのも一方法であろう。